

## 第16話 帰国生の公立入試（中学）

これまでは私立受験を主にして帰国入試を見てきましたが、もちろん帰国生の進む道はこれだけではありません。日本の子供達に混じって公立中学に入り、高校受験を目指すのも一手です。むしろ、その方が合っている子も多いです。それは高校入試の話を参考にしてもらうとして、ここでは第3の選択肢、「公立中高一貫校」についてお話しします。

公立学校の在り方は地域によって大きく違いますので、ここでは東京限定の話としてお読みください。

東京の公立中学には、大きく分けて3つの形態があります。

- ・市立、区立中学：居住学区で決められた入学先の学校。いわゆる「地元の中学校」と呼ばれるものがこちら。東京都では、地区によって条件は違うが、入学先を選択することが出来る。
- ・都立中学校：都立高校の附属中学という形で、併設型とも呼ばれる。都内に5校あり、高校進学時に入試がないため、中高一貫での教育が受けられる。
- ・都立中等教育学校：中学・高校という分け方をせず、「前期中等教育」「後期中等教育」という形で、高校内容までを一貫して行う学校。ここ10年ほどで出来た、新しい形態。

上記の都立中学校と中等教育学校をまとめて「中高一貫校」と呼び、私立受験よりも熾烈な戦いが繰り広げられています。ピーク時には、10倍を超える倍率もありましたが、ここ数年は加熱がおさまってきた感があります。それでも依然、4~8倍といった高い倍率となっています。学芸大付属や筑波大付属といった国立校に、大学合格実績が食い込んできたこともあり、進学校として認知されるようになりました。

さて、中高一貫校の受検とはどのように行われているのでしょうか。

（余談ですが、私立では試験を受けるので「受験」、公立では検査を受けるので「受検」と表記します。まあ、同じことなのですが。）

都立の中高一貫校は全部で10校。また、唯一の区立である九段中を含め、全部で11校しかありません。これらの学校に10000名近い受検生が集まることとなります。

ちなみに神奈川県では、2017年度に横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校附属中が開校し、全5校。都外、都内問わず、その他の中高一貫校を併願することは出来ません。

適性検査という問題が出され、基本的に国語の文章を読み、それを要約・論じるような「文系的」な問題と、グラフや実験結果を考察して解答する「理系的」な問題が一般的で、いわゆる国算社理の科目試験はありません。

文系・理系問わず、高い文章力と分析力が必要にはなりますが、一般受検との並行は可能です。適性検査の対策のみでは一般受検の問題を解くことは出来ませんが、一般受検の勉強をしていれば、一般常識で解くことの出来る類の問題になります。

上記の適性検査の他に、小石川・白鷗高付属・立川国際の3つの学校では、特別枠というものを設けています。それぞれの出願資格を見てみましょう。

小石川中：自然科学分野でのコンクール入賞等の実績。

白鷗高付属中 特別枠A：漢検2級、数検準2級、英検2級以上または同等の資格を保持。  
特別枠B：囲碁将棋・邦楽・演劇などの伝統芸で入賞歴など。

立川国際中：いわゆる帰国生枠。

立川国際では帰国生枠の入試があるのですね。帰国生が取れば、作文（日英選択）と面接のみが検査内容になります。面接の中でプレゼンテーションを行わなければならないのが少し特殊ですが、作文は割と素直な題なので、しっかり練習すれば対応できるでしょう。

参考：作文の過去問

<http://www.tachikawachuto-e.metro.tokyo.jp/site/zen/content/000027194.pdf>

白鷗中のA枠も、帰国生に有利なものですね。検査内容は活動報告書（100点満点）と面接（300点満点）なので、とても面接の比重が大きいです。

特別枠だけでなく、一般枠でもうまく「ハマる」帰国生は多いと思います。海外育ちならではの感性の見せ所ですね。

倍率も高く狭き門ですが、単純な学力ではなく、文章力や思考力・考察力で勝負が出来るので、受験の中に組み込んでみても良いのではないのでしょうか。

著者：谷口 仁

Oct 24 2016